

(2) 国際シンポジウム開催事業「国際シンポジウム『早老症と関連疾患 2018』」

千葉大学大学院医学研究院 教授

『早老症と関連疾患 2018』 実行委員長 横手 幸太郎



横手 幸太郎 実行委員長

開催概要：

本会は爾来、ウェルナー症候群（WS）、ブルーム症候群（BLM）、ロスマンド・トムソン症候群（RTS）のRECQヘリカーゼ関連疾患を対象として米国で数年ごとに開催されてきた。今回はこの他に我が国で難病指定を受けている色素性乾皮症、コケイン症候群、そしてハッチンソン・ギルフォードプロジェリア症候群（HGPS）など広く早老症を扱い、さらに関連する細胞老化、ミトコンドリア、iPS細胞など幅広い老化関連研究を包含した。また患者や家族にも出席を募り、そのニーズを吸収することで、真に役立つ新たな研究を切り開くことを本会のテーマとした。

参加者は予想を上回る総勢135名（うち29名が外国人）であった。海外からの5名を含む計21名の患者やご家族も参加された。メインセッションでは、12人の外国人を含む27人の招待演者から講演を頂いた。

初日は、半世紀以上に渡りWSの遺伝学的研究を牽引されたGoerge Martin教授（University of Washington）のPlenary Lectureによる、WS研究のレビューにより開始された。続いて3人の演者によりWSの臨床像、DNA複製における機能、国際レジストリの取り組みなどが紹介された。また、Patient and family sessionと題してWS、コケイン症候群の日本人患者会の代表、英国と米国のRTSの患者会代表にそれぞれご登壇いただいた。夕刻にはポスターセッションを行ない、患者会も含む35題のポスターが発表され、研究者同士、患者、家族が親しく交流する貴重な機会となった。また、厚生労働省の難治性疾患等政策研究事業「早老症の実態把握と予後改善を目指す集学的研究」とAMED難治性疾患実用化研究事業「早老症ウェルナー症候群の全国調査と症例登録システム構築によるエビデンスの創生」の3年目終了時の成果報告会が行なわれ、WSガイドラインが6年ぶり改訂となることが報告された。

2日目は、Plenary Lectureにおいて、Vihelm Bohr教授（National Institute of Aging）からWRN 蛋白の分子機構について、林崎良英教授（理化学研究所）から壮大なオミックスプロジェクトであるFANTOMについて、それぞれ御講演を頂いた。さらに横手から、日本のWSレジストリの取り組み、代謝リスクファクターを制御する治療、また骨髄異形成症候群の増加などを報告した。また、全てのポスター演者が登壇し、2分のプレゼンを行なった。特別講演では、Leslie Gordon教授（Brown University）からHGPSの症候、遺伝子の同定、治療基盤の整備と治療法の探求についてお話を頂いた。



主催者挨拶
宮坂 信之 財団理事

さらに、患者さんと交流する患者会セッションをWS、コケイン、英国人のRTSの3疾患合同で行ない、WS 5名（うちイタリア人1名）、コケイン症候群2名、英国RTS 1名を含む21人の参加を頂いた。患者さんの現況、症状、研究への期待などが共有され、難病政策に造詣の深い鈴鹿医療科学大学の葛原茂樹先生からもコメントを頂いた。続いて、糖尿病、難治性潰瘍とその靴型装具による予防について講義があり、WS、コケイン症候群の患者が熱心に参加する姿が見られた。

3日目はモーニングセミナーにて、原英二教授（癌研究所、大阪大学）より、細胞老化とテロメア、発癌について幅広いお話しを頂いた。さらにコケイン症候群と色素性乾皮症について、Jan Hoeijmakers 教授（Erasmus University）よりPlenary Lectureを頂き、加えて3人の先生方にこの2疾患の臨床、基礎の両面からお話を頂いた。最後に、iPS細胞は将来の治療選択肢となるか？という題で、WSとHGPSのiPS細胞について、続いて聴覚障害と神経障害に対するiPS治療の可能性について御講演を頂き、閉会となった。

本会では、早老症のみならず一般老化も対象としたが、幹細胞、発癌、サルコペニア、臓器連関など多彩なテーマについて、日本を代表する研究者から御講演を頂き、様々な老化関連分野の知識を結集するという本会の趣旨に沿う形となった。

成 果：

いずれの講演もトップレベルの研究者によって行なわれ、研究者の興味を大いに刺激する内容であった。35題のポスターセッションも大きな成果であったと思われる。招待演者や参加者が活発に討議する姿がみられ、良い交流ができたという声が多く聞かれた。人的交流から実際に共同研究を惹起することで新しい科学的成果を生み出すという目的を達成することが出来たと考えている。

一方で、患者ならびに患者家族からも、研究者と接し最先端の研究の状況を知ることが出来、実際の悩みやニーズを伝えることが出来たことや、実践的な足潰瘍予防の講義について、高評価のコメントを頂いた。Plenaryの演者である Jan Hoeijmakers 先生からは、患者さんの存在により課題がはっきりし、モチベートされたというスピーチがあり、患者さんのニーズをくみ上げ最先端のサイエンスと融合させるという取り組みが有効であったと考えている。

終わりに：

今後このシンポジウムで得られた知識と交流から、多くの新しいプロジェクトや新しい共同研究が生まれることで、個々の研究者が発展し、患者に役立つ医療が生まれることが期待される。最後に、貴重な資金を拠出頂きこのようなシンポジウムを開催させて頂きましたこと、貴財団に厚く御礼申し上げます。



講演会場